



黄金の森

2024年 9月 13日発行
南風原町立 南風原中学校
発行者 校長 比嘉智也
校長だより第10号

【教育目標】 目標を持ち自ら学ぶ生徒 心豊かで思いやりのある生徒 心身ともに健康で忍耐力のある生徒

悩みたいときには素直に悩んでいい！

2学期が始まって約2週間が経ちました。生徒の皆さん、2学期の学校生活はどうですか？さて、去る7月26日～8月11日にはパリオリンピックが開催されました。日本人選手の活躍も記憶に残っていることと思います。また、8月28日～9月9日の期間は、『パリパラリンピック』が開催されていました。今号はその『パラリンピック』から学ぶことについてを記事にします。

『パラリンピック』から学ぶこと！

『パラリンピック』から学ぶことはたくさんあります。その中の重要なポイントを挙げていきます。

○障害への理解と受容

パラリンピックを通じて、障害に対する理解が深まり、偏見や誤解が減少します。選手たちがどのように困難を乗り越え、努力しているかを見ることで、障害についての認識が変わります。



○努力と忍耐

パラリンピックの選手たちは、身体的な障害を持ちながらも、世界の舞台で最高のパフォーマンスを目指して日々努力しています。彼らの姿勢は、忍耐力や努力の大切さを教えてくれます。

○多様性と包括性

パラリンピックは、多様性を尊重し、すべての人が平等に競技する場を提供しています。これにより、社会全体で包括性を推進することの重要性が再認識されます。

○可能性の広がり

選手たちが成し遂げる驚異的な成果は、どんな困難な状況でも可能性が広がることを示しています。自分自身の限界を超える力や、逆境に打ち勝つ力を学ぶことができます。

○スポーツの力

スポーツには、人々を結びつけ、共感や連帯感を生む力があります。パラリンピックもその例外ではなく、世界中の人々が同じイベントを通じて感動し、応援し合うことで、強い絆が生まれます。

これらの学びは、日常生活にも応用でき、より良い社会を作るためのヒントとなりますね。

車いすテニス金メダル 小田凱人 選手



パリパラリンピック車いすテニスで金メダルを獲得した車いすテニスプロ小田凱人選手を、紹介します。小田選手は、9歳で骨肉腫を発症。小学校の徒競走ではいつも1位、足の速さが自慢だった小田凱人選手。幼少期からサッカーに打ち込み、プロ選手になることを本気で夢見ていました。

しかし、9歳のとき、プレー中に激痛が走る。利き足である左の股関節に、骨の悪性腫瘍である骨肉腫が見つかりました。つらい抗がん剤治療を経て、股関節と大腿骨の一部を切除し人工関節を入れる大手術を受けました。

「もう走れなくなる」と医師に告げられ、手術の後遺症で左脚の自由を失いました。

大好きなサッカーができなくなっても、スポーツへの情熱が消えることはありませんでした。入院中、小田さんの強い思いを汲み取った担当医が教えてくれたのが、パラスポーツでした。

「車いすに乗る人だけが出来るスポーツがあって、パラリンピックという世界大会がある。主治医の先生からそう聞いて、初めてパラスポーツのことを知りました。そこから YouTube でいろんなパラスポーツの動画を見て、直感でビビッときたのが車いすテニスだったのです。競技用車いすを巧みに操作しながら、激しいラリーを繰り広げる選手の姿を見て、『これがやりたい』と明確に思いました」

サッカー選手の夢を断たれた当時10歳の小田さんに希望を与えたのは、車いすテニスのトッププレーヤーで2023年に現役を引退した、国枝慎吾さんでした。病院のベッドの上で、ロンドン・パラリンピックの決勝を戦う国枝さんの気迫に釘付けになっていました。「めちゃくちゃカッコいい。自分もこうなりたい」9ヵ月にも及ぶ入院生活の中で、国枝さんの存在が光となり、車いすテニスを早く始めたい一心で、懸命にリハビリに取り組んだそうです。

家族の支えを受けて闘病生活を克服した小田さんは、退院後すぐにラケットを振り始めました。車いすテニスのできる地元のクラブに通い、めきめきと実力をつけていきました。しかしその後、2度にわたり、がんの肺転移が発覚。不安と恐怖に圧倒されそうになりながら、それでも憧れの人の背中が遠ざかることはなかったそうです。

「国枝さんのように、車いすテニスで世界一になりたい。僕ははじめからすごく高いところを目指していたので、治療が苦になることはありませんでした」仰ぎ見る存在がいたからこそ、過酷な治療も乗り越えられたそうです。

がん再発から見事復帰を果たし、車いすテニスを始めて4年目の2020年、18歳以下の世界大会である世界ジュニアマスターズで、史上最年少優勝を飾りました。翌年には世界ジュニアランキング1位を獲得し、15歳でプロに転向。2022年の楽天ジャパンオープンでは、ずっと目標にしていた国枝選手と同じコートに立ち、激戦を繰り広げるまでに躍進しました。



小田さんの選手としての強みは、積極的に前に出るプレースタイルと、相手を圧倒するパワーショット。そしてそれに呼応するかのよう、メディアや SNS で見せる強気な姿勢もまた彼の持ち味です。悩んだり、落ち込んだりすることとは無縁にも思える強靱なメンタリティは、どのようにして形成されたのか。そう聞くと、しばらくの沈黙の後、あふれるように言葉が出てきました。

「悩んだり、落ち込んだりすることって、ダメなことなんじゃないか。それが良くないというふうなされている社会の風潮こそが、僕は良くないと思います。僕のこれまでの発言から、ずっと前向きに強く生きてきたように捉えられることが多いのですが、決してそんなことはありません。退院した頃の頃は、車いすです外に出るのも、杖で街を歩くのも嫌でした。人に見られることに違和感を覚え、子どもなりにすごく悩みました。でも結局のところ、ハンディキャップを持ったことで何か起きるのかといったら特に何もなくて、だったら『別にいいよね』って思えるようになったんです。

僕は病気をきっかけに、障害とともに生きることになりました。もちろん最初はすごく落ち込みました。でも、車いすテニスに出合って徐々に良い成績を出せるようになっていくと、障害をマイナスに感じることは少なくなっていきました。マイナスどころか、人とは違う強みだと感じています。だから病気のことも治療のことも、当時思い悩んでいた自分自身のことも、『嫌な過去』ではないんです」

さらなる高みを目指しつつ、次世代の子どもたちを育てたいという強い意思を持つ小田さんは、未来のある子どもたちに向け、次のようなメッセージを送りました。

「もしも、何かに悩んでいる子どもたちに僕から伝えられることがあるとしたら、悩みたいときは素直に悩んでいいということです。別に落ち込んだっていいし、塞ぎ込んでもいい。悩んでいる自分に*あらがう方が良くないと思います。その後に、新しく夢中になれるものが何かひとつでも見つければ、決して無駄にはならないはず。『あのとき辛いことがあったから、こうなれた』と胸を張って言える自分が待っていると思います」

*あらがう=従わないであらそう。抵抗する。逆らう。



校長クイズ

- 1 秋が旬の果物なのに夏の主張が強いものは何？
- 2 柔道、剣道、空手をする人が好きな果物は？

前号クイズの解答

- 1 ベスト
- 2 つば